

書評

『だまされる視覚 錯視の楽しみ方』

著者：北岡明佳（立命館大学総合心理学部教授）

株式会社化学同人 DOJIN 文庫 007 2022年3月刊

本書は2022年3月に刊行された最新刊であるが、2007年にDOJIN選書として出版された同一タイトルの本に、新たな内容を追加したものである。15年前の著作を元にして、新たな内容を追加したものである。15年前の著作を元にして、追加部分と一体に完成度の高い書物になっている。文庫本サイズ（A6判 105mm × 148mm）で本文202ページとコンパクトながら、大変充実した内容が詰め込まれている。

本書は錯視の解説書でも錯視図の作品集でもない。著者による錯視を解説、特にその原理に加えて錯視のデザインを自作するための「手引き」が詳しく書かれている。一言で評すると本書は極めて有益で役に立つ、錯視のデザインを觀賞する楽しみを大きく増す一冊である。本書を手にする人のほとんどは、北岡先生による鮮やかなカラーの錯視のデザイン作品を目にしているものと思われる。また、新たな錯視のデザインが次々と登場する「北岡明佳の錯視のページ」webサイト <http://www.ritsumeai.ac.jp/~akitaoka/> を見ていると思われる。見事な錯視デザインの作品を見ていると、「どうしてこんな錯視が作り出されるのだろうか」、「錯視の効果をこんなに大きくするには、どんなテクニック・工夫が行われているのだろうか」と考える人は多いと思われる。本書はこの様な人達のニーズに的確に答えている。また、「錯視のデザインの楽しみは、自分で錯視デザインを制作してみることではるかに大きくなる」という著者のお勧め（全く同感である）と、キチンとした記述は見事にかみ合っている。愛好家に本書を勧める理由である。

本書の有用性の説明が進行してしまっただが、以下内容を手短かに紹介する。Fig. 1は本書のカバーである。表紙に著者による錯視デザイン「蛇の回転」を配し、裏表紙

には「まわる！ ゆれる！ ゆがむ！ 驚異の錯視ワールド、ふたたび」の文字がある。主要目次は以下である。「まえがき 第1章 錯視とは何か 第2章 静止画がなぜ……止まっているものが動いて見える錯視 第3章 同じ明るさなのに……明るさの錯視 第4章 水平のはずが……傾きの錯視 第5章 赤く見えても赤ではない……自分でつくれる色の錯視 第6章 だまし絵は錯視か？——いろいろな錯視 あとがき」。本書は知覚心理学の初学者向きだが、専門性のある内容も備えている。各章の必要な記述には参考文献が示され、巻末には4ページの文献リストがあり更に勉強したい人に対するガイドとなっている。個々の解説内容はとてもまとめきれないので、ごく一部だけ触れる。

「止まっているものが動いて見える錯視」では、発見の歴史を辿りながら各種の錯視を紹介、制作法のポイントについても丁寧に解説している。図は白黒の印刷であるがページ一杯の大きさで錯視が良く見える。また「四色錯視」として、白、黒に加え明るい色と暗い色の組合せで錯視を作ることができ、色としてはどんな色でも良く、配色は作る人のセンスとしている。パソコンを使用して簡単に描ける例、ワードのソフトだけでも可能な例がそれぞれの錯視に対して準備されている。「明るさの錯視」では、万遍なく各種の錯視を紹介している。私は特に「錯視に気付かせるプレゼンテーションのやり方の一例」の記述に惹かれた。(87ページ) 図の見え方と物理的実際をいっぺんに説明するのではなく、まず相手に見え方を尋ね、次に「それは物理的実際とは違う」と説明する手順である。錯視デザインについて少し勉強して知識が付いたと思っている人にとって、手引書にこのような記述があるのは嬉しい。



Fig. 1 文庫本のカバー



Fig. 2 カラー口絵のページ

「傾きの錯視」では、最初にツェルナー錯視の描き方から始まる「用いる平行線としてはノートの罫線でも十分というより、線が薄いので条件が良い」として、斜線を手書きしても十分な錯視の効果が出るという、気軽に自作できる方法から始まる。私は、図を45度傾けると錯視量が増大するという事をこれまで全く意識していなかった。驚くとともに専門家の著作は有難いと感じた。「カラー画像には赤の成分が無いのに赤色のイチゴが見える」錯視は注目度が高い、本書では6ページのカラー口絵(Fig. 2)を用いると共に、webサイト上で公開している、色

の錯視を自分で試し、製作できるオンライン処理のサイトを紹介している。最終の第6章では、「錯視デザインとだまし絵は、アートとしては同種で、サイエンスとしては別種である」との指摘が書かれている。大変興味深く、また他の書物では得られない知識であるが、短い言葉で要約するのは困難なので紹介に変える。

以上、本書の効能は力不足で伝えきれしていない、ぜひ手に取っていただきたい一冊である。

桑山哲郎